『タイタンズを忘れない』という作品から得たもの

中　尾　晋　吾

①英語タイトル：What I Learned From the Work *Remember the Titans*　②英語名：Shingo Nakao　③所属：欧米言語文化講座英語圏　④　　⑤
⑥　　⑥論文を書くにあたっての関心事：黒人差別はなくなるのかということ・スポーツを通じた人間関係・差別、偏見に対しての正確な知識　⑦キーワードｉ）スポーツを通じた人間関係　ii）黒人差別問題　iii）偏見・固定観念

Ⅰ．はじめに

なぜこの『タイタンズを忘れない』(*Remember the Titans,* 2000年　アメリカ公開、2001年　日本公開）という作品を選んだかというと、黒人差別問題に元々関心があり、スポーツを通じて偏見を超えた人間関係を築いていくこの作品がとても印象的で興味深かったからである。前々から友人に見るように薦められていたが、予想以上の印象を受けた。実際に私はアメリカのヴァージニア州に住んでいるわけではないが、アメリカのより現実的な黒人差別という状況に触れることができた。実際にヴァージニア州に住んでいる人々はこの作品から自分とは比べ物にならないほどの印象をうけただろう。私はこの執筆に当たって、まずこの作品のおおまかなあらすじを記し、そして次にこの作品から得たもの、そして、自分に起きた変化をまとめていきたいと思う。

Ⅱ．あらすじ

1971年、ヴァージニア州アレクサンドリア。アメリカ国内では公民権運動が盛り上がり、この保守的な小さな町にも変化の波が押し寄せてきた。白人学校と黒人学校が統合され、T・C・ウィリアムズ高校が開校。アメリカンフットボールチームも統合され「タイタンズ」が結成される。統合に反対する住民達のデモが起こる中、ヘッド・コーチとしてやってきたのが、数々の栄光に輝く黒人コーチ、ハーマン・ブーンだった。これまではヘッド・コーチを勤めていたビル・ヨーストは自分の地位が黒人に奪われた事にショックを受ける。反対していた町の人々もヨーストを支持するが、これまで育ててきた選手達のためにも、彼はアシスタント・コーチを引き受ける決意をする。チームが一丸となるために、ゲティスバーグ大学で合宿が行われることになり、

生徒達はバスで出発する。だが偏見はなかなか消えず、事あるたびに激しい対立が起きる。白人のチーム・リーダー、ゲーリーと黒人のチーム・リーダー、ジュリアスはさっそく殴り合いのケンカ。しかしブーンは「怒りを抑えそのエネルギーを勝負にぶつけろ」と訴え、軍隊のように厳しいトレーニングを強いる。ある朝、ブーンは生徒達を叩き起こし、ゲディースバーグの決戦場までランニングさせる。そこは南北戦争で多くの若者の命が失われた歴史的な場所だった。そこでのブーンの言葉は若者達の心に深く響く。その日をさかいに、チームは確実に変わり始めた。町の大人たちの心の壁は消えなかったがチームは順調にトレーニングを重ね、遂に最初の試合が行われた。相手は全員が白人のヘイ・フィールド高校。途中でミスをしたピーティーが試合をはずされかけたが、ヨーストの指示で配置換えが行われ、見事ウィリアムズ校の勝利。興奮にわくサンシャインはピーティーを連れて、白人専門のパブに入るが入店を拒否される。人種の壁はまだまだ根強かった。第二戦のハーンドン高校との試合では同点から見事に点を奪い取り、勝利。ただ同僚達の活躍を見ながら、出番の回ってこないロニーは複雑な気持ちだった。早くフィールドで活躍したい！そんな彼の夢が遂に現実になったのは、グローブトン高校との第三戦。途中でメンバーの‘牧師’が骨折し、彼が代理でクオーターバックとなった。サンシャインの大活躍でチームは見事に勝利。いよいよ地区大会の決勝へと進出する。混成チームの大躍進は、一方で偏見を拭い切れない人々の反感も買った。北ヴァージニア地区決勝では町の有力者の指示で審判がわざと不利なジャッジを下す。殿堂入りが目前のヨーストは不正をわざと見逃すように圧力をかけられていたが、純粋にフットボールを愛する娘シェリルのためにも不正を正す。チームは勝利を手にするが、ヨーストは殿堂入りの資格を失う。チームはいよいよ地区大会へと進出し快進撃を続ける。若者達のひたむきな情熱に町の人々もいつしか心からの拍手と喝采をタイタンズに贈っていた。だが大事な決勝戦を目前に控えた夜、誰もが予期しなかった悲劇が起ころうとしていた。タイタンズのキャプテンであり全米先発でもあるゲーリーが交通事故にあってしまい、下半身不随になってしまったのである。チームは不安定なまま決勝戦を迎える。決勝戦は**アンドリュー・ルイス高校に優位にゲームが進んでいく。ハーフタイムに監督、コーチがあきらめかけていたときにチームメイトみんなが決してあきらめず、勝利へこだわる気持ちを爆発させ勝利へと導き、見事地区優勝を果たす。**

Ⅲ. この作品から得たもの・自分に起きた変化

アメリカでは白人至上主義が残っていて、黒人の学校は白人とは別、黒人の投票は妨害され、図書館に入れず、裁判の傍聴席も白人は一階、黒人は二階、バス、食堂のテーブル、トイレや水飲み場も別という状況の中で、白人学校と黒人学校が統合された。そのような中で、アメリカンフットボールというスポーツを通じてチームメイトが差別を超えた深い友情にまでつながったこの作品には得るものがとても多くあった。私も部活を小学校・中学校・高校と渡ってサッカーをしていたので、つらくてくじけ

そうな状況、厳しい練習、スポーツを通じての人間関係といったように共感できるところが多くあった。しかし、生徒たち・監督・コーチはそこに人種差別問題が入り込んでいるので自分には経験することのできない難しく困難な問題に直面していた。黒人のヘッドコーチであるハーマン・ブーンは自分自身もこの問題に直面していて、さらにチームをまとめなければならないという立場にあってタイタンズを地区優勝、そして全米２位にまで勝ち進んだことは多くのアメリカ人に人種差別問題に対する考え方に影響を与えたことだろう。

ここで自分自身が得たものはスポーツを通じた人間関係が周りの人に影響を与えていることである。しかも、ここでは国家問題でもある人種差別問題への考え方に対してである。生徒同士の偏見を超えた人間関係から監督とコーチが、大人の観点からも学ばされる場面もあった。始めは応援していなかったＴ・Ｃ・ウィリアムズ高校の生徒たちも決勝戦には応援してきていた。そして、最初は冷ややかな視線で見られていたハーマン・ブーン監督も最終的には地域住民から暖かい声援をもらっていた。この変化を見ていると、とても微笑ましい光景であった。彼らの高校時代はとても想像することができないほどのものとなったことだろう。

差別というものは永遠になくなることのない問題であると私自身は考えた。歴史的にみても黒人差別問題は遠い過去にさかのぼるものである。しかし、タイタンズのチームにおける若者がはるか昔からあった偏見を乗り越えて協力しあった。そして大人たちにも影響を与えた。自分自身もこれまで生きてきて形成されている特定の人種に対しての偏見や固定観念はある。この作品からその人種が果たしてどのようなものなのか、自分はその人種をしっかりと知ろうとしているのかと自分に問いただしてみたくなった。ちゃんとした知識もなくて周りに流されている情報を鵜呑みにしていないか、ということにも気づくことができた。エンディングの場面を見ていたら分かることであるが、黒人のチーム・リーダーであるジュリアスがその後、全米先発に選ばれたとのことである。ここにも黒人差別の改善が見られていると感じた。

黒人監督ハーマン・ブーン（Denzel Washinton）　　白人監督ビル・ヨースト（Will Patton）

（『タイタンズを忘れない』ホームページから）

また、強く印象を受けた人は黒人のヘッド・コーチのハーマン・ブーンである。彼の指導が無かったならチームタイタンズは上手くまとまらなくて差別意識が残ったままで崩壊していたことだろう。彼の人種の壁を越える厳しい指導にとても感動した。実際

にその課題をこなした生徒たち全員は賞賛に価するだろう。スポーツの上では「黒も緑も青も白もオレンジも関係ない」とブーン監督が言った場面はとても印象的だった。これはあらすじでも紹介したが、海兵隊の訓練のような早朝のランニングの途中にアメリカ南北戦争において北軍が南軍を破った地であるゲティスバーグの戦場に立ち寄ったときのことである。そのときの台詞を作品(『タイタンズを忘れない』　日本語吹き替え版)の中から引用したい。

「**5万人の兵士がここで命を落とした。まだ俺たちは同じ戦いを続けている。この緑の野原が若者の血で真っ赤になった。心の悪意が兄弟を殺した。憎しみが家族をずたずたにした。耳を済ませろ。死者から学べ。この神聖な場所で。1つにならないなら俺たちもずたずたになる。彼らのようにな。お互い好きにならなくてもいい。だが相手を認めろ。もしかしたら、いつの日か、人として向き合えるだろう**」

この日を境にして、キャプテンであるゲーリーが肌の色に関係なくプレイの良し悪しでメンバーにものを言うようになった。そして、チームが初めてまとまり始める。黒人差別意識がとても残る中で白人、黒人のどちらにたいしても厳しく指導するブーン監督にチームのメンバーはとてつもなく影響されたことでしょう。また、ヘイ・フィールド戦の試合前にはまたこのように言っていた。

「あっちのチームには人種問題がない。こっちにはある。だからこそ強い。これだけは言っておく。何者もわれわれを引き裂くことができない。」

人種問題の有無について、試合前に触れていた。でもそれを強さにして試合前に望めと言っているブーン監督にとても感銘を受けた。そして、白人コーチであるヨーストとの関係にも注目した。ディフェンスは白人側が任されていて、オフェンスは黒人側が任されていた。お互いの戦略のことには口出しするなというここにも人種の壁が感じられていた。チームメイト同士は途中で差別意識が問題でケンカや仲間割れなどが見られたが、お互いを認め合う姿勢が見られていた。しかし、生徒たちを指導する立場にある監督同士には生徒以上に人種の壁を感じた。やはり高校生よりも倍以上も生きているとそれまで持ち続けてきた偏見・固定観念は簡単には拭い去ることのできないものであるということにも着目できた。おそらく現在の日本でもこのような状況なのではないだろうか。ここで周りにある情報を自分でしっかりと判断する力というものが必要であるということに気づいた。最終的に州の決勝戦でヨーストが生徒たちに学ばされる場面や優勝してブーン監督と抱き合う場面は大人が人種差別の壁を超えた場面と見ることもできた。とても感動的な場面であった。

自分も部活動を通じて厳しい監督にであってきたが、人種問題というものを意識したことがなかった。人間関係というよりは自分のプレイの質に集中していた。部活動に人種問題が関わってくるという感覚はどんなに苦しいものであったのであろうか。もし、自分がタイタンズにいたとしたら、黒人、白人どちらの立場にいたとしてもその苦しさに耐えることができたのであろうか。自分は高校時代レギュラー争いというもので、つらい思いをしていたと感じていたが、この作品を通じて自分は周りから偏

見など何も感じないでプレイできていたことを痛感した。今まで考えてきた部活動というものに対して新たなものを発見することができた。さらにアメリカにおける人種差別という状況をより現実的な目で見ることができた。

Ⅳ. 最後に

今まで映画を見てきて、多くの作品に感銘を受けてきた。友情、恋愛、戦争などテーマは様々なものであった。しかしどの分野にわたっても感銘を受け新たに考えさせられることが多々あった。これからも、もっとたくさんの映画を見て自分の見解を広げていきたいと思う。

⑧学んだこと：これまでこの作品のおおまかなあらすじ、そして自分が得たもの・自分に起きた変化について個人的な意見をまとめてきた。簡潔に自分が得たものと起きた変化を述べると、

①スポーツを通じて人種問題という偏見を超えた人間関係が周りの人々にまで影響を与えたということ

②アメリカにおける黒人差別問題についてより現実的に理解できたこと

③私が特定の人種の集団に対して不確かな固定観念を持っていることに気づいたこと

主にこの３点を学ぶことができた。これらのことは今まで私が生きてきて、意識をしていなかったことである。この作品を見て新しい発見ができた。自分自身の成長にもつながり、より広い見解をもつこともできた。今後この作品を見て学んだことをいかして、より広い視野を持って生きていきたい。

⑨SUMMARY

I learned mainly three points below from this work

1 To realize that people were influenced by human relations between black and white people through the sport, American football.

2 To understand about the racial discrimination in America more realistically.

3 To realize that I have an uncertain stereotype of some racial groups.

参 考 文 献

Boaz Yakin 監督 『タイタンズを忘れない／吹き替え版』

http://www.simpson-bruckheimer.com/rememberthetitans/rememberthetitansstory.htm

http://www.simpson-bruckheimer.com/rememberthetitans/rememberthetitanscast.htm

トニ・モリスンから学ぶ生き方

山　根　志　保

①英語タイトル：The Way of Life to Learn from Toni Morrison
②英語名： Shiho Yamane　③所属： 科目等履修生　④　　⑤
⑥
⑦本論を書くにあたっての関心事： フロンティアスピリット・差別問題・他の人が成し得なかったことを志した気持ち

Ⅰ．トニ・モリスンについて
Ⅱ．人種差別
Ⅲ．女流作家として
Ⅳ．夢を持つこと

興味をもった理由：女流作家というだけでもなかなか受け入れられるのが困難であった時代に、黒人に対する差別意識のあるアメリカで、黒人女流作家がどのように自分の作品を世に広めていったのか、どのように人々に受け入れられていったのかに興味をもった。そこから目標を持って強く生きる力を学びたいと思った。

Ⅰ．トニ・モリスンについて

トニ・モリスン（Toni Morrison, 1931－）は、黒人女流作家です。彼女が生まれた1931年は、黒人の奴隷制度こそはなかったものの、やはり黒人に対する差別はありました。その中で彼女の両親はそれを物ともせず懸命に働き、また差別を気にすることなく振舞うほど前向きでした。そんな両親の姿を見て、彼女自身も自分が黒人であることを誇りに思いながら育っていくのです。もちろん彼女自身差別を目の当たりにすることもありましたが、それでも彼女は黒人だけの社会にとどまらず、白人も生活する場所へ足を踏み入れてゆくのです。

彼女は大学卒業後、教師になりました。やがて大学教授となり、小さな頃から読書が好きだったため、その大学の文芸グループに入ることにしました。そのグループでは毎月会合があり、その際、その月の担当者が自分の書いた作品を持っていき発表するという活動を行っていました。この頃のモリスンはまだ「書くこと」にはさほど興味がなく、会合にぎりぎり間に合う、という中で作品を作るといったくらいでした。

そんな中、彼女は結婚し息子を産み、その後も教授を続けますが、第二子を身ごもった

あとに辞めます。そしてその頃に家族三人でヨーロッパ旅行に行きますが、そのときに旦那との関係がこじれ、結局離婚することになってしまいます。その後、子供二人を育てるために編集の仕事に再就職しました。

そこでは教科書を扱うことがあり、その教科書を見て、いまだに黒人に対する差別があるということを感じました。そのときに「黒人差別をなんとかしたい」という感情が彼女の中に生まれ始めたのです。またこれと同じ頃、一人で子供を育てている中で孤独を感じることも多く、子供が寝静まった後に文章を書き始めました。これがモリスンの作家人生の始まりと言ってもよいでしょう。

そして彼女は1970年に『青い眼が欲しい』でデビューしたのでした。これは、白人文化に自分たちが吸収されてしまわないようにという彼女の気持ちが詰まった作品であり、当時には衝撃的な内容でした。また、1981年には『タール・ベイビー』で黒人社会の中級階級化による価値観の分裂を述べ、1988年には『ビラヴド』で奴隷時代の苦しさゆえに逆に希望が見出せたことを示し、黒人男女からの共感を得たのでした。また、この作品では人生愛についての美しい描写がありました。

Ⅱ．人種差別

モリスンはしばしば、白人と黒人の二分化について触れていました。アメリカにはたくさんの移民が押し寄せ、その中にはヨーロッパ系、アジア系もたくさんいました。それにもかかわらず、差別されるのは黒人だけ、他は皆「白人」という言葉でまとめられ、その人たちがどこの国の出身なのかはさほど関係なく扱われていました。それに比べ、黒人は肌が黒いということだけで差別されてきたように思います。ヨーロッパ人たちは開拓地アメリカで自分たちが優位に立つために、さらには黒人の力を知った上でそれを恐れ、肌が黒いという自分たちとの“違い”につけ込んで、黒人を抑制し続けました。しかもその差別は本当にひどいものだったと思います。「奴隷」という言葉が存在する自体おかしなことだと思いませんか？人を人でないように、まるで物や道具であるかのように扱う。そんな時代があったことをとても悲しく思います。本当に人間の汚い部分だと思います。

先日、ベルギーのブリュッセルに旅行に行きましたが、そのときにおもしろいことがありました。ベルギーでは黒人はもちろん、アジア系・トルコ系・アラブ系・インド系などヨーロッパ以外のさまざまな人種の人たちも生活していました。ベルギー人もそういったいわゆる移民の人たちも、その人が何人であるか、ということには一切意識を置いておらず、ベルギーに住む同じ人間としてみていました。実際、私も私の母も、街角で道を聞かれることがしばしばあり、街頭インタビューまでさせられそうでした。ベルギーではその人の出身や国籍は一切関係なく、そこに住む同じ仲間という意識が強く見られ、それこそが人間のあるべき姿ではないかと感じました。

また、パリに行ったときの話ですが、パリにも移民が実にたくさんいました。植民地時

代の名残なのか、ベルギーよりもさらに黒人の多さが目立ちました。また、パリではインド系やアラブ系の人たちが自身の民族衣装を着ているのも目立ちました。パリは大きな街で人口も多いので、ブリュッセルよりもさらにその人が何人かということは気にしないように感じました。

今でこそこのようにいろいろな国の人が共存することが当たり前の国もあるようになってきましたが、日本ではまだ差別とまではいかなくとも、日本人以外に対する目というのが存在すると思います。「外人」という言葉が存在するように、日本人以外の人を見ると目をそらすのはよく見受けられる光景です。これは今後の日本の課題ではないかと考えます。

Ⅲ. 女流作家として

モリスンはまた、当時には珍しい女流作家でした。女性が文章を書くことが認められなかったというのもひとつの差別ですね。彼女が執筆を始めた頃も、まだ女流作家は敬遠されており、モリスン自身も自分を作家と認めることには抵抗を感じていたようです。しかし彼女はもう書くことから離れられなくなっており、編集の仕事を非常勤にし、主に作家活動を行うようになります。

もちろん彼女の作家人生は初めからうまくいったわけではありませんでした。特に白人からの批判は相次ぎましたが、彼女の作品は評価されて雑誌等にも載るようになり、白人で彼女を支持する人もたくさんいました。その人たちによってトニ・モリスンの作品、そして彼女自身も救われたのです。

やはり彼女が書き続けたこと、そして彼女を応援し支え続けた人、そのどちらもがなければ前へ進むことはできなかったでしょう。モリスンは女性ですが、彼女が書く文章は「文章」であり、それは男性が書こうと、女性が書こうとなんの違いもないはずです。そこにある違いは、誰が書いたのかということだけであり、それは個人の問題なのです。こういう場合に、作った人は関係なく、良いものは良いということの大切さを感じます。

このように、人種差別にも、男女差別にも負けずに、自分を信じて、そして周りの人を信じたモリスンの作品は次第に人々の心に染み込んでいき、ついには1993年にアメリカの黒人では初めてのノーベル賞を受賞します。これは作家界の革命と言えるほどの出来事ではないかと思います。

前例のないことをするのは勇気がいるし、特に差別される側の人がそれをすることはもっともっと勇気も力もいることだと思います。それをやったモリスンはやはり偉大な人物だと思います。彼女は自分を過信したり、ひけらかしたりすることもなかったのですが、彼女の生き方は、自分に誇りを持つこと、自分というものを持つこと、あきらめないこと、夢を持つこと、そういうことを教えてくれる気がします。

Ⅳ. 夢を持つこと

トニ・モリスンの生き方は、私たちに光を与えてくれます。

人は人と違うことを嫌う反面、自分というものを持ちたがるということもあると思います。人は皆それぞれ違うし、だからいろいろな考えの人がいて、その結果考え方の合わない人というのが出てくるのも仕方のないことだと思います。しかし、だからといってその人を差別するだとか、その人を否定するというのは間違っています。周りに合わせてしまうこともよくないと思いますが、他人を認めることは人生において非常に重要な役割を果たすのではないかと考えます。

モリスンは黒人で、しかも女性で、その当時の作家としては不利な立場にあったと思います。でもそんな逆境の中でも彼女は書くことをやめませんでした。彼女は、伝えたいことを文章の中に込めました。「黒人差別をなんとかしたい」という彼女の強い気持ちが人々の心に届いたのでしょう。時代が移り変わっていく中で、彼女の存在は間違いなく黒人差別に変化をもたらしました。

そのひとつの目標のために文章を書き続けること。それは並大抵の努力ではできないと思うし、また彼女一人では成し得なかったことかもしれません。彼女の熱意が、そしてそれを応援する人たちすべての力によって、黒人差別はなくなっていったのだと思います。

夢を持つこと、そしてその夢をあきらめないことを彼女は教えてくれました。

⑧学んだこと：彼女は私たちに人生のお手本を示してくれたと思います。周りから差別され、しかしそういった状況の中でも必ず仲間がいること、そしてその仲間が支えになってくれることを知りました。また、自分を信じること、自分のことを誇りに思うこと、これには自分がどれだけのことができるのか、ということではなく、どれだけ力を注ぐことが出来るのかということが大切だと思いました。

⑨Summary : I think she showed the model of the life to us. She was discriminated because she was the black. However, she had a many friends in this situation by all means and it was they that supported her. I think it is important for us to believe and proud of ourselves. In addition, it is also important that how much energy can we concentrate on something.

参考文献

『現代作家ガイド４　トニ・モリスン』　木内徹　森あおい［編著］彩流社（2000年）
『パラダイス』　トニ・モリスン　早川書房（1999年）

ミュージカル

～人を魅了し続けるもの～

鶴　崎　和　寿

①英語タイトル：Musical ; Long-run Fascinator
②英語名：Kazutoshi Tsurusaki ③所属：欧米言語文化講座 英語圏
④　　⑤　　⑥

⑦論文を書くにあたって：ミュージカルの作り出す世界。ミュージカルを観る前と観た後の変化。ミュージカルの魅力とは。観る側と演じる側からミュージカルを考える。ミュージカルを文学として捉える。

I．はじめに

日本では、劇団四季などをはじめとして多くの劇団がある。しかし、これでもまだまだ数は少ないほうで、アメリカやイギリスなどではさらに数多くの劇団が存在する。その中でもミュージカルのメッカとなっているのが、ニューヨークのBroadway（図１）、そしてロンドンのWestendである。また、アメリカにはBroadwayの他にも、Off・Broadway、Off・Off・Broadwayが存在し、アメリカでのミュージカルの人気の高さを示している。

ミュージカルは一見、文学ではないように思えるかもしれない。しかし、ミュージカルには脚本や歌詞があり、その点を考えると文学であるといえるだろう。また、歌詞が無いので文学といえるのか、と思われるような作品もある。例えば、『*Stomp*』や『*Blueman Group*』（図２）のような楽器のみで行われるものだが、これらもその音楽の中にストーリー性が感じられる。言葉がないにも関わらず、ストーリーを伝えられるなんて、ミュージカルの持つ力のすごさに驚くとともに、伝えようとする気持ちこそが大事なのだと教えてくれる。

図１：Times Square in N.Y.

このように様々なミュージカルが存在するが、テレビや映画といったように

多種多様なエンターテイメントがある中で、なぜ今なおミュージカルが人々の心をつかみつづけているのだろうか。その魅力を、ミュージカルの持つ力や歴史を通してみていきたいと思う。

図２：Ｂｌｕｅｍａｎ

Ⅱ．ミュージカルの軌跡

ミュージカルとオペラの違い、その答えをはっきりと答えられる人はそう多くはないと思う。実際のところ私も、この違いは単に、オペラは高級なもので、ミュージカルは庶民的なもの程度しか考えていなかった。これについて調べると、違いがはっきりと答えられないのも仕方がないのかもしれないと思った。何故なら、ミュージカルはもともとオペラから発展したものであるからである。そこで、ここからはミュージカルの成り立ちについて述べていきたい。

ミュージカルのもともとの起源は先ほど述べたとおりオペラであり、これがアメリカ独自の文化となるミュージカルへと進化していったのである。しかしながら、そんなアメリカンミュージカルも常に栄光の時代を歩み続けてきたわけではない。１９６０年代にはベトナム戦争の影響により、ミュージカル界は後退し始めたのである。ミュージカルをさらに広めるために行われていたシネマミュージカルもまた同様である。戦争は様々な面に影響をもたらし、決してメリットと言えるものは何もないのだ。

そんな中、１９８０年代に入ると、ミュージカルが確立されてからずっとミュージカルの中心地はブロードウェイであったが、アンドリュー・ロイドウエーバーの『キャッツ』（*CATS*）や『オペラ座の怪人』（*The PHANTOM of the OPERA*）クロード・ミッシェル・シェーンベルグの『レ・ミゼラブル』（*Les Miserable*）といったイギリスのミュージカル作品が台頭し始めた。ミュージカルにおいて最も権威を持つトニー賞もイギリス作品ばかりが受賞するようになり、ブロードウェイ生まれのミュージカルが後退していくのであった。そんな存在感が薄くなってしまったアメリカンミュージカルも、『クレイジー・フォー・ユー』（*Crazy for You*）のリバイバル公演によって復活するのである。そして今にいたっている。

ブロードウェイがアメリカでとても愛される存在であることを象徴する出来事がある。それは９．１１の同時多発テロの際、娯楽関係施設はすべて完全に

ストップした。しかし、ブロードウェイはなんとその２日後に公演を再開したのである。メジャーリーグや映画、金融市場が６日後に再開されたのに比べると異例の早さである。その理由は、ニューヨークの人々を元気づけようとするブロードウェイの想いからだ。もちろん、娯楽関係が中断されていたので、儲け時だと考えたことも理由の１つであろう。しかし、それだけのパワーを持っているとはやはりミュージカルの持つ力の大きさには驚かされるばかりである。

Ⅲ．ミュージカルの魅力とは

私は以前シカゴでミュージカルを観たことがある。私にとって初めてのミュージカル鑑賞であり、そのとき観たのは『ウィケッド』（*Wicked*）であった。これは、『オズの魔法使い』（*The Wonderful Wizard of Oz*）の物語の裏に隠された、２人の魔女の友情についての物語である。もちろん役者たちの言葉は英語であるためすべて言葉を理解できるわけではなく、むしろほとんど理解はできていなかった。しかし、言葉が理解できなくても、大袈裟ではなく本当に、劇場内の雰囲気やミュージカルの迫力でストーリーがなんとなく理解できてしまうのである。そして、ストーリーが進むにつれて、私は劇場内のなんともいえない雰囲気にのみ込まれていき、普段過ごしている世界とはまったく別の世界にいるような感覚になったのをよく覚えている。私のこの経験のように、まったく違う空間に入り込めるという点が、ミュージカルにおいて最大の魅力であると思う。この時、ミュージカルを含め、人の心を打ったり、気持ちを伝えたりすることに言語は関係ないのだ、と感じた。

また、これは友人の話なのだが、もう一つの魅力としては、同じ演目であっても観るたびに違うミュージカルになっているということである。このように、何度観ても飽きない、それどころかさらによくなっていたり、前とはまた違う世界にいけたりするのであろう。だから何年間もロングランを続ける大ヒット作品が生まれるのだと思う。

先ほど述べた友人だが、彼は俳優を目指しており日々練習に励んでいる。今度は彼に演じる側としてのミュージカルの魅力とは何か、という質問をしてみた。彼の話によると、ミュージカルの中では違う自分になることができ、そのおかげでより大きく感情を表現できることが何よりの魅力だという。このように普段の自分では表現できないことがミュージカル内ではできる、といった点は演じる側もさぞ気持ちいいであろう。そういったミュージカルは、演じる側と観る側を含め、劇場内に全くの異世界を作り出し、劇場にいるすべての者を魅了し続けているのであろう。

ミュージカルの作り出す異世界に入れることで、普段の生活の中での嫌なこ

とも、悲しいこともその世界の中ではきっぱり忘れられる。そして、劇場を出たら現実世界に戻るが、何かすがすがしいというか、「さぁ明日から頑張ろう」というような活力がもらえるのだ。だから、疲れた時やストレスが溜まった時などに気分転換に行くのもいいかもしれない。

このように、人々に感動と活力を与える力はミュージカルの強みであり、だからミュージカルは、本当にすばらしい芸術であり、文学なのである。私は将来、教師を目指しているのだが、ミュージカルのように、学校の楽しさや感動などを与えながら、子どもたちをひきつける教師になりたい。その為にも、何か自分にしかない魅力をもった人間でありたい。

⑧学んだこと：人に気持ちを伝えることに言葉は必ずしも必要ではなく、むしろどれだけ伝えようとする気持ちがあるかである。気持ちが大事だという点においては、たとえ言語が同じであっても変わらない。
自分にしかない何かをもつことの重要さ。それがその人の魅力になるのである。
⑨Summary in English：

・When you tell your thought, languages are not always so significant. Rather than them, you need much zest you try to tell.

・The importance of gaining something special which is your attraction.

参 考 文 献

喜志 哲雄 著 『ミュージカルが《最高》であった頃』(2006年・晶文社出版)

http://www.geocities.co.jp/Hollywood-Theater/6572/musical-rekishi.htm

http://www.tv-asahi.co.jp/ss/118/world/top.html

http://tick.skr.jp/musical/whois.html

Stand By Me から見る思春期像

山 地 宏 幸

① The Adolescent Image Seen in *Stand By Me* ② Hiroyuki Yamaji
③ 欧米言語文化講座 英語圏 ④ ⑤
⑥
⑦ 生涯の友人とはどのような存在か・何に向かっていけばいいのかという迷い・少年たちはなぜ社会に反抗しようとするのか

Ⅰ.『スタンド・バイ・ミー』

ⅰ.原作者

スティーヴン・E・キング(Stephen Edwin King)は 1947 年に米国メイン州ポートランドでスコットランド人とアイルランド人を祖先に持つ父ドナルドと母ネリー・ルース・ビルズベリーの間の第二子として生まれる。本来はホラー作家でるが、ホラー以外の作品に対しての評価も高い。

代表作に『シャーシャンクの空に』(*The Shawshank Redemption* 1994)、『グリーンマイル』(*The Green Mile* 1996)、(*Stand By Me*)などがる。

ⅱ.映画 *Stand By Me* について

監督：ロブ・ライナー 製作：アンドリュー・シェインマン 脚本：レイナルド・ギデオン ブルース・A・エヴァンス 音楽：ジャック・ニッチェ 撮影：トーマス・デル・ルース

公開：米 1986 年 8 月 8 日 日 1987 年 4 月 18 日

出演：ウィル・ウィートン、リバー・フェニックス

余談だが、現在『２４』に出演している、キーファ・サザーランドも出演している。

ⅲ.はじめに

私は中学校時代の大半を世間的に言うところの不良、ヤンキーとして過ごした。ひょんなきっかけから、中学三年の半ばぐらいから勉強し、無事、そこそこの高校に進学することができ、現在大学に通っている。最近 *Stand By Me* を見たところ、共感ができる部分が多く、昔が懐かしく感じられた。中でも最後にでてくる“私は 12 歳のころに持った友人に優る友人を持ったことがない”というセリフが非常に印象的でこのレポートを書くことにした。

iv. 作品の概要

1986年公開。この映画の原作はスティーブン・キングの中編小説『恐怖の四季』(*Different Seasons* 1982)の中のひとつ、「死体」(The Body)である。物語の舞台となるのは、キングがよく使う架空の町キャッスルロックであり、映画ではオレゴン州、原作ではメイン州となる。

大まかな話としては、町の若者が汽車にひかれて死んでしまい、その死体が放置されているという噂を聞いた4人の少年たちはその死体を見つければ町のヒーローになれると思い、死体を探しに行くというものである。非常に単純な話ではあるが、その小さな冒険の中で、登場人物である4人の多感な思春期らしい言動、行動、心理、そして友情といったものがたくみに描かれている。そして、このころの少年達(おそらくは誰しもそうであろうが)の早く大人になりたい、大人になってみたいという純粋な思いがあちこちにみてとれる。

v. 煙草を吸う4人

物語の序盤に小さな隠れ家で煙草を吸っているシーンがある。煙草というものは中学生ぐらいの年頃の少年達にとっては一種のステータスのようなものと考えられる。その年頃というのは自分が大人なのか子供なのかよくわかっておらず、煙草を吸うことで自分は大人なのだ、子供ではないのだ、ということをアピールしているように思える。私も昔はことあるごとに仲間とコンビニや公園にたむろし、味すらもよくわからぬ煙草を吸ったり、酒を飲んだりしたものである。社会への反抗と、よくメディアなどで耳にするが、その表現はどうなのだろうと思う。経験から考えると、社会への反抗などそんなだいそれた理由で不良などするやつはいないと思う。つまりは、そうすることが楽しいのである。中学生にもなれば、常識的にやってはいけないことは昔から耳にたこができるほど聞いてきた(煙草、酒は、二十歳になってから、喧嘩はしてはいけない、など)ので、本当はやってはいけないことぐらいは心得ているのだが、そのやってはいけないことをみんなでやるということはとてもスリリングで楽しいものだった。教師に追い回されるのは日常茶飯事だったし、夜中に煙草を吸っていたところを警察に見つかり、禁煙講座なるものを警察署でうけさせられたりもした。しかし、教師をからかいながら逃げたり、警察をまくったりするのはやはり楽しかった。怒られるのはわかっているのに授業中の学校の廊下を自転車でよく走り回っていた。追いつけるはずもないのに走って追いかけてくる先生たちを見るのはなんともおかしいものだった。

Stand By Me の4人もやはり同じなのではないだろうか。主人公の一人であるゴーディ・ラチャンスは親から仲間と縁を切るように言われるシーンが何度かあったが、縁をきるはずはない。それは、アメフトのスター選手であった兄の死を境に親から相手にされなくなった自分の存在意義を見出せるのはその4人グループの中でだけだったからだろう。

vi. 死体探しへの冒険

4人のうちの一人、バーン・テシオの情報からどうやら電車にひかれた若者の死体が放置されているらしいと聞き、それを見つければヒーローになれると考え、4人は死体探しへの

冒険に出る。有名な４人が線路の上を歩いていくシーンも見られる。最近、某大学の学生がこれを真似て線路の上を歩いていたところ捕まったというニュースを見た。

左からクリス・チェンバース、テディ・ドチャンプ、バーン・テシオ、ゴーディ・ラチャンス

Ⅱ.大人になるということ

人生というものは大なり小なり、多くのイベントを通じて大人へと近づいていくものだと思う。また、そのイベントを通じて友人と親しくなっていくのだと思う。この作品を見てそう確信した。ゴーディが年上の不良グループに拳銃を突きつけるシーンや、クリスがゴーディに自分の進路や学校で起きた盗難事件のことについての悩みを打ち明けるシーンなどから見て取れる。私たちの立場に置き換えて考えてみようと思う。中学になると学ランが半ズボンから長ズボンに変わる。半ズボンから長ズボンに変わっただけでも、自分は中学生になったのだ、もう子供じゃないのだと意識する。小学校では考えられなかった恋愛というものも出てくる。また、修学旅行や集団宿泊学習などで普段話さないようなことを友達と話したり、自分たちで主体的に活動する機会が多いこういった行事ではその活動を通して無意識のうちに友達と親しくなり、大人に近づいているように思える。高校になると文化祭や体育祭も自分たちの手で作っていかなければならなくなり、恋愛も少し本格的なものになってくる。このように大なり小なりのイベントを通し、少しずつ大人へ近づいていく。あの頃とは違うのだと昔の自分と今の自分を比べ、少し大人になった気分になる。普段、私は、「俺の心は１７歳やけん。」と冗談交じりで口にするが、あながち冗談ではない。どうしても自分が成人を迎えたとは考えられないのだ。大学に入ってもう少しで三年経つが、自分が大人だと意識できるイベントがなかったからだろう、とこの作品を見ながら実感した。取り分け、この短い冒険は、子供が成長するイベントが多く含まれているように思える。

ⅱ．１２歳の頃に持った友人

この物語は成長して、小説家となったゴーディが弁護士になったクリスが刺殺されるというニュースを新聞で見て、昔を思い出すという始まり方で、最後も成長したゴーディの“私は12歳のころに持った友人に優る友人を持ったことがない”のセリフで終わる。

冒険の最後はゴーディ以外のほかの三人が消えていくような描写で終わり、“上の学校に上がると新しい友人もでき、すれ違いざまに挨拶をかわすぐらいになってしまった。”のセリフとともに回想が終わる。このシーンも非常に印象的だった。私も中学校時代あれだけ一緒にいた不良仲間も高校に進学したとたん、いや、最初のうちは連絡を取り合ったりもしていたが、進学して少し経つと、連絡も取らなくなり、彼らが何をしているかわからなくなった。いつも一緒にいたのは５人か６人ぐらいだろうが、今でも連絡をとっているのはそのうちの一人だけなのだから、不思議なものである。噂であいつがああなった、こうなったというのは、耳にしていたが、あまり気にも留めなくなっていた。成人式で久しぶりに会った時、昔の親友たちと距離を感じた。中学を出て仕事を始めた者、もう堅気ではなくなってしまった者といろいろいたが、もうみんな大人だなと感じた。私よりもずいぶん早く社会に出たみんなはいろいろ大人になる経験を積んだのだろうなと思った。

作者が書いた“私は12歳のころに持った友人に優る友人を持ったことがない”という言葉はそのときの友人が一生、無二の親友になるというのではなく、12歳の頃出会ったからこそ12歳の頃の親友に成りえたという意味であろうと私は解釈している。私もそうであるが、中学時代には親友だと感じていても今はやはり違うなと思う。

その時々の親友というのは部活動や受験勉強など、不良行為もそうかもしれないが苦楽をともにした友人が親友になりえるのだなとこの作品を通じて感じた。実際、今親しい友人はそういう苦楽をともにしてきた友人たちである。

⑧ この作品を通じて学んだこと

人は人生で起こる様々なイベントを通じて大人になっていくと学んだ。そう考えると、今の自分は無駄な時間を過ごしていると思う。残りの大学生活を有意義に使いたいと思った。友人というものがどのような存在か改めて考え直した。

⑨ SUMMARY: I learned we grow up through many events which happen in our lives. According to this idea I noticed that I was wasting my time now.
I reconsidered what friends are.

ティム・バートンの魅力

馬　越　由　佳

①The World of Tim Burton
②Yuka Umakoshi
③欧米言語文化講座　英語圏
④
⑤
⑥
⑦ティム・バートン監督の映画は、子どもから大人まで幅広く親しまれている。彼の作る映画の魅力は、どこにあるのか。なぜ彼の作る映画はおもしろいのか。

Ⅰ．ティムバートン（Tim Burton）の人生

1958 年 8 月 25 日、カリフォルニア州バーバンクで二人兄弟の長男として生まれる。

12 歳から 16 歳にかけてティムは、同じくバーバンクに住む祖母のところに引越し、その後祖母が所有していたガレージの上の小さな部屋に移り住んだ。9 年生のときに、廃棄物汚染防止のためのポスターをデザインし地域の作品展で一等賞を取り、その絵はバーバンクのごみ収集車の側面に飾られていたこともあった。

1976 年 18 歳の時に、ティムはウォルト・ディズニー（Walt Disney）が創立したカリフォルニア州ヴァレンシアにある大学、カリフォルニア・インスティテュート・オブ・ジ・アーツ（California Institute of the Arts）に奨学金を得て入学した。本大学は将来のアニメーターを養成する場として、ディズニー・スタジオによって前年に設置された学科があった。

1979 年ティムはディズニーに参加し、コンセプチュアル・アーティストとし

て働いている間に、執行部のジュリー・ヒックソンと、創作開発課のトム・ウィルハイトに出会う。彼らの力添えで6万ドルを与えられたティムは、1982年お気に入りの児童作家スース博士を招いて書いた詩を基にしたストップモーション・アニメの短編『ヴィンセント』(*Vincent*,1982)を製作した。『ヴィンセント』は多くの評論的称賛を受け、シカゴでは2つの賞を、フランスのアヌシー映画祭では評論家賞を受賞した。

やがてディズニーを去ったティムは、『ピーウィーの大冒険』(*Pee-wee's Big Adventure*,1985)を監督することになる。この時起用した、作曲家ダニー・エルフマン(Danny Elfman)はティムの生涯の友人となる。またティムは熱狂的な『ゴジラ』ファンとして有名であり、この作品にゴジラとキングギドラを登場させた。同年、『ヒッチコック劇場』(*Alfred Hitchcock Presents*)の1作品『ザ・ジャー』(*THE JAR*,1986)の監督を担当。翌年、『世にも不思議なアメージングストーリー』(*Amazing stories*)では『ファミリー・ドッグ』(*Family Dog*,1985)のアニメーションデザインを担当、このエピソードはその後シリーズ化されティムは製作総指揮を務めることとなった。

Ⅱ. 本格的長編映画の始まり

その後、ティムは脚本家のサム・ハムと共にワーナー・ブラザーズから提案された『バットマン』(*Batman*,1989)の脚本に取り組み始めていたが、スタジオは脚本執筆の進展を見守っているうちに、企画のゴーサインを出すのを渋るようになった。

そうこうしているうちに後に渡された『ビートルジュース』(*Beetlejuice*,1988)の脚本のほうが先に進み、1988年に公開されアカデミー最優秀賞メイクアップ賞も受賞した。

この作品の大ヒットにより、『バットマン』製作の許可がおりた。公開後、10日間で1億ドルを突破する最初の映画となり、最終的には5億ドルを超える結果となった。

次の映画『シザーハンズ』(*Edward Scissorhands*,1990)の主役には、エドワードにジョニー・デップ(Johnny Depp)を起用した。これがティムとジョニー・デップとの出会いである。後にジョニー・デップはティムのことを「本当の友」と称している。

ティムは、『バットマン』を「親しみのもてない自作映画である」と告白した

が、後に作られた続編の『バットマン・リターンズ』(*Batman Returns,*1992)では公開後 3 日間で 4770 万ドルの収入をあげ、最終的には世界中で 2 億 6800 万ドルの総収益をあげた。

その後も『ナイトメアー・ビフォア・クリスマス』(*The Nightmare Before Christmas,*1993)、『エド・ウッド』(*Ed Wood,*1994)、『バットマン・フォーエヴァー』(*Batman Forever,*1995)、『スリーピー・ホロウ』(Sleepy Hollow,1999)、『ビッグ・フィッシュ』(*Big Fish,*2003)、『チャーリーとチョコレート工場』(*Charlie and the Chocolate Factory,*2005)、『ティムバートンのコープスブライド』(*Corpse Bride,*2005)、など数々の作品を手がけてきた。

『ティムバートンのコープスブライド』では、CG が全盛期のなか、静止している物体を 1 コマ毎に少しずつ動かして撮影し、あたかもそれ自身が動いているかのように見せるストップモーション・アニメーションという技法を使って撮影しているが、ストップモーション・アニメとは思えないほどのリアルな動きだ。

Ⅲ. 最後に

ティム・バートンの映画はなぜおもしろいのか。私は、ティム・バートンの人生から何を得たのか。

『ティムバートンのコープスブライド』や『チャーリーとチョコレート工場』といった作品は、一見コミカルである。しかし、登場人物はどこか物寂しい雰囲気をもっており、コミカルだけれどコミカルでない。そのバランスが素晴らしいと思う。また、色の使い方も非常にうまい。『ティムバートンのコープスブライド』では、生と死の世界を描いていたが、死の世界のほうが明るい色が使われていた。また、『スリーピー・ホロウ』では、ハリウッド映画としてはめずらしいほどに、2 時間の間に何人もの首をバサバサと切り落としていった。首の切り口もなまなましかったが、逆にそれを観客は期待しているのではないだろうか。

ティムは、特にB級ホラー映画・カルト映画を偏愛していることでも有名である。彼の作る作品はどこかそのような雰囲気をもっている。

彼は一つ一つの作品にこだわりをもって作っている。それは、『ティムバートンのコープスブライド』でストップモーション・アニメを用い、妥協しなかったところからもわかるだろう。しかしそれだけでなく、私は彼の作品、特にアニメーション作品には彼の愛情もつまっていると感じた。彼はもともとディズニーに参加していたこともあり、彼のアニメ映画はどこかディズニーを思わせる。彼の愛するオカルトなテイストを作品に含ませたり、ゴジラやキングギドラを登場させるところには、彼の作品への愛着を感じる。

私がティム・バートンの人生から得たものは、こだわりをもつ、ということだ。彼が『バットマン』の続編を製作することに乗り気ではなかったように、この先自分の好きなことばかりやれるわけではない。しかし、彼の望む作品を製作してきたように、自分の好きなことができるときもある。どんなときでも、妥協せず、こだわり、そして自分らしさを取りいれる、ということが彼の映画の魅力であり、私が学んだことである。

⑧学んだこと、得たもの　ティム・バートンは決して彼が望む作品ばかりを製作してこれたわけではないが、どの作品にもそれなりにこだわりがある。したくない、と思うことでも自分らしさとこだわりをもって取り組むことが成功につながる、ということ。
⑨英語サマリー　Tim has made many hit movies.　He never compromised on how to make movies and he always has much concern with his works. If I always do my best,　I can get success.

参考文献

http://www.geocities.co.jp/Hollywood-Kouen/3520/timf.html
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A1%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%9A%E3%83%BC%E3%82%B8
http://homepage1.nifty.com/sountolab/timpro.htm

映画『8 MILE』から学んだこと

～超える、超えないは自分しだいだ～

古賀　亮

① 英語タイトル：What I was influenced from the movie “8 MILE”
② 英語名：Ryo Koga
③ 所属：欧米言語文化講座 英語圏
④
⑤
⑥
⑦論文を書くに当たっての関心事：人生観、努力、音楽

Ⅰ.はじめに

今回、論文を書くにあたって、なぜこの作品を選んだのかを簡単に説明したいと思います。私は音楽を聴くことが好きで、これまでさまざまなジャンルの音楽を楽しんでいました。しかしながら、ヒップホップだけはなぜか敬遠していたのです。完全に「食わず嫌い」なのだと思いますが、全く興味がわかなかったし、第一に、ヒップホップのあの独特な文化がどうも苦手でした。そんな私でも、アメリカのみならず世界中で大ヒットのヒップホップ界のカリスマ「EMINEM」の自伝的な映画である、この『8 MILE』(2002年製作) のことは高校時代から知っていて、なんとなく気になっていました。「8 MILE」とは何なのか、ヒップホップの世界はどんなものなのか、そして主人公はどんな生き方をしているのか。この映画を見ることによって、何か新しいものを得ることが出来そうな気がしていました。とても興味深い作品だと思っていながら、なかなか見る機会が無いまま時間が過ぎていたのですが、そんな時に、今回の論文を書くことになり、ちょうどいい機会だからこの映画を見てみよう、と思ったのがきっかけでした。

Ⅱ.EMINEMとは？

1972年10月17日生まれ。本名マーシャル・″ブルーズ″・マザーズⅢ。幼い

頃から極貧の環境に育ち、12 歳の時までカンザスシティとデトロイトを母親と共に 2、3 ヶ月ごとに転々と過ごす。友達もできず、いじめられ、自殺未遂も経験する。悪環境の中、自然とアフリカ系アメリカ人層やヒップホップに親しむようになる。14 歳ごろから本格的に MC として活動しはじめ、黒人優位のヒップホップ界において、白人ながらいくつもの MC バトル・コンテストに挑戦する。

99 年に『ザ・スリム・シェイディ LP』をリリースし、メジャーデビュー。全米ポップス・チャート初登場 2 位、全世界で 600 万枚を超えるセールスを記録。そのアルバムからは「マイ・ネーム・イズ」というグラミー受賞曲も生まれる。2000 年、セカンドアルバム『ザ・マーシャル・マザーズＬＰ』は、1 週目セールスが 176 万枚を突破、ソロ・アーティストとしての 1 週目売上げ記録 1 位を樹立、初登場以降 8 週連続全米 1 位を達成。全世界で 1700 万枚以上を売り上げる。'01 年 2 月に行われたグラミー賞 ・では 3 部門の受賞。2002 年リリースのサードアルバム『ザ・エミネム・ショウ』は初登場以降全米チャート 5 週連続のトップを独走。2004 年、4 枚目のアルバム『アンコール』をリリース。

これまでに 6,500 万枚のワールド・アルバム・セールスを誇る。主演映画『8 Mile』は、全米興行成績初登場 No.1、第 75 回アカデミー賞ベスト・オリジナル・ソング受賞。

↑ **EMINEM**（公式 **HP** より）　　↑『**8 mile**』（**DVD** のパッケージより）

Ⅲ.あらすじ

この映画は、ヒップホップ界のカリスマ、EMINEM（エミネム）の半生をもとにつくられた作品です。舞台は１９９５年のミシガン州デトロイト。当時のデトロイトは、自動車工業で栄えたかつてとは異なり、すっかり荒廃していた。

主人公のジミー・スミス Jr.はラップで成功することを夢見ている白人の若者である。ほとんど毎日仲間たちとつるんで、遊んだり、バカをやったりしていた。ある日、ガールフレンドと別れ、アパートを追い出された彼は、自動車のプレス工場で働きながら、無職の母親と幼い妹と共にトレーラーハウスで貧しい暮らしをすることになる。ヒップホップのクラブ「シェルター」では、毎週、勝ち抜きのラップバトルが行われていた。ジミーの仲間の一人がこのバトルのMCをしており、ジミーはこのバトルに優勝して、スカウトされ、プロとしてデビューすることを考えていた。ラップの実力は十分のジミーだったが、バトルでは力を発揮できないまま終わることが続いていた。黒人優位のラップの世界において、白人であるジミーは大きなプレッシャーに立ち向かわなければならなかったのである。そんな状況だったので、失敗して自信を失うことも少なくは無かった。ある日、仕事先のプレス工場でモデルを夢見ているアレックスに出会う。二人は恋に落ちたのだったが、アレックスは、成り上がるために別の男と関係を持ってしまい、それを知ったジミーは、大きなショックを受けてしまう。そんな中、裏切り、貧しい暮らし、差別、暴力、といった逆境を跳ね返し、自分の道を切り開くべく、シェルターでのバトルに再び挑戦する。ステージ上で巧みな言葉を放ち、オーディエンスを味方につけ、順調に勝ち進む。そしてついに優勝を果たすのであった。

Ⅳ.作品の背景

ｉ.『8MILE』の意味するものとは

この映画のタイトルである『8 MILE』とは何を意味するものでしょうか。その答えは、ミシガン州デトロイトに実在する「8 mile road」にありました。この一本道によって、白人と黒人の居住地区がはっきりと区別されていました。8マイルロードを境に北側の地区には白人が、南側の地区には黒人が住んでいたのです。エミネムは、映画のメイキング映像の中で「8マイルはデトロイトの境界線だ。俺が育った頃は人種の境界線でもあった。黒人と白人を分離する明確なラインだ。」と述べています。エミネム自身は、8 マイルロードの南側の黒人の居住地区に暮らしていました。このことについて、エミネムは「ラッパーには重要なことだ、デトロイト側に育つということはね。ヒップホップの世界ではデトロイト側がホンモノで郊外はニセモノと見なされる。ヒップホップを知

らない人には関係無い話だ。意味も無い。でも関わっているヤツにはデカい。」と話しています。映画の中では、いつの日かデトロイトで成功をおさめて 8 マイルロードをこえる、という目標にむかうジミー。8マイルロードは、ただ単に人種の境界線を表しているだけではなく、「夢を達成するために超えなければならない大きな壁」を表しているのではないのでしょうか。

この映画の監督、カーティス・ハンソンは、同じくメイキング映像の中で「題名の『8 MILE』は我々が伝えたかった世界をまさに表現する言葉だった。」と述べています。

↑8 mile road（メイキング映像より）

ii.ヒップホップの世界

この映画を見る上で必要なヒップホップ独特の文化について触れておきたいと思います。まずは、ラップについて。ラップは、リズムに乗せて言葉を並べていく、という音楽のジャンルなのですが、ただ言葉を並べればよいだけではないのです。韻を踏んだり、風刺をしたりと、さまざまなテクニックを織り交ぜ、音にリリック（歌詞）を乗せていくものなのです。

次に、ラップバトルについて。この映画の中で重要なシーンでもあるラップバトルは、フリースタイル（ある程度即興でのラップ）で、いかに相手を攻撃できたのか、観客の反応で勝敗を決め、勝ち抜き方式で次の対戦に進んでいく、といったものです。リリックで相手を攻撃し、攻撃されたらやり返す。これを即興で行うものなので、かなりのテクニックを要するものです。エミネムは、ラップバトルについて、メイキング映像の中で「バトルは二人のラッパーのさしの勝負だ。タイトルをかけて言葉の巧みさを競う。もっと意味のある競り合いというか、人生をかけた戦いさ。負けたらこの世の終わりって感じ。みんなはこういう“大したことじゃない”、“またやればいいさ”そんなんじゃない。

人生が終わった気分だ。客が何人だろうと一度マイクを握ったら必ず裁かれる。負けたら諦めたっていい。でも負けは強烈だ。リベンジもありえる」と述べている。

元々、ラップは黒人の文化であり、ヒップホップ界では黒人優位が続いている状況です。映画の中でも、主人公が白人だということで、差別を受けたり、リリックの中で攻撃の材料にされたりする場面が見受けられます。このような黒人優位の世界で、白人が成功をおさめるというのはかなりすごいことであるといえます。

V.作品より学んだこと

この作品から、主人公のジミー、エミネムの生き方から学んだ大きなことは、さまざまな逆境にも負けず、自分の夢を追い求める姿勢です。ただ自分の夢をかなえる、というだけでも決して容易なことではありません。それなのに、主人公ジミーは貧しい暮らし、人種差別、裏切り、といったさまざまな逆境の中で、自分の夢をかなえてみせたのです。私は作品を通し、このジミーの生き様に魅せられてしまいました。

現在、私は自分の夢に向かって大学生活を送っているのですが、ジミーの生き様を目の当たりにし、自分はかなり甘いのだということに気づかされました。現在の自分の状況を考えてみると、別に裕福なわけではないですが、特に不自由することも無く、これといって困難な状況におかれているわけでもありません。自分の夢のために特にこれといった努力をしていないというのも事実です。夢に向かう姿勢の違いを、自分の情けなさを知ることができました。

エミネムは、映画のメイキング映像のインタビューの中で「誰もが越えたいと思う境界線を持っている。誰にでも”８マイル”はあるのだ。超える、超えないは自分しだいだ。」と述べています。まさにその通りだと思える言葉で、この言葉が心に響きました。誰にだって夢はある。その夢に到達するまでの道のりはおそらく長く、険しいもので、いつしかその道の途中で自分にとっての「８マイルロード」にぶつかるでしょう。そこであきらめてしまうのか、絶対にあきらめず挑戦し続けるのか。私は絶対に後者でありたいと思うのです。これからの人生、必ず自分にとっての「８マイルロード」にぶつかることになるでしょう。そんなとき、どんな逆境であろうとも乗り越えられる、そんな人間になりたいと思いました。

この映画を見る前は、正直、ラップをやるような人間はならず者だ、ただか

っこつけてチャラチャラしているだけの人間だ、という様な偏見を持っていました。しかしながら、映画を見ることで、ヒップホップの世界に生きる人々の有様を垣間見ることができ、「かっこいい」と思えるようになりました。このように、映画には、ただの娯楽としての役割だけではなく、自分の視野を広げてくれる、自分の人生観を良い意味で変えてくれるという側面があると思います。これからも、たくさんの映画に出会い、さまざまなものを得ていけたら最高だと思いました。

⑧学んだこと：
・逆境に負けずに夢に向かう姿勢
・ヒップホップのかっこよさ
⑨SUMMERY
I learned mainly two things: to do the best in order to be what I want to be in the future and the coolness of hip-hop culture

参考資料

『8 MILE』 DVD ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン
EMINEM 公式 HP http://www.universal-music.co.jp/u-pop/artist/eminem/
Wikipedia http://ja.wikipedia.org/wiki/EMINEM